

# 1. 猫目の獣人

新しく移住した大きな街の、大通りにある立派な石造りの建物。

ここは冒険者に仕事を斡旋する、ギルドという施設だ。

共に依頼をこなす相手が欲しい人には、相性の良い相手を紹介してくれる仲間マッチングサービスもある。

ギルドに登録するなり早速そのサービスの利用を願い出た私は、今日はドキドキしながら顔合わせにやって来ていた。

そうして通された応接間で対面したのは、キラキラと輝くレモン色の瞳をした、猫獣人だった。

「リツカと申しますにや。よろしくにやあ」

彼は縦長の虹彩を瞼の裏に隠して、猫のようにニコニコと笑う。

和やかなその笑みを見ているとみるみる内に緊張がほぐされてい

って、釣られて私も笑い返す。

「よろしく願いします」

「うにゃあ」

お辞儀をすれば、彼もお辞儀を返してくれた。見たところ、おかしな人ではなさそうだ。

変な人とマッチングされなくて良かったと思う反面、男性か不安が脳裏にチラつく。

女性冒険者で、しかも採集専門。私はとても、ナメられやすいのだ。違う街のあまり良くないギルドで紹介された男性冒険者には、嫌な記憶しかない。

（でも……最初から決めつけては駄目よね）

見たところ、とても温厚そうな青年に見える。

顔を見上げればニコニコと笑いかけてくれるし、優しそうだ。

——しかし改めてその容姿を見てみると、あまりにも見目が良くて驚く。

私は、不安を抱いていたのも忘れて。彼の整った容姿に目を奪われ、不躰ながらもまじまじとその姿を観察してしまった。

髪の毛は毛先が外にピンピンと跳ねている、緑がかった褐色。

髪の中から生えている獣耳も外側は同色で、ピンと立ち上がってこちらに向いていた。

獣耳の内側は愛らしい薄ピンク色で、白いモコモコとした毛も大変可愛らしい。何だか無性に触ってみたくなる。

ぱっちりとした大きな眼は少し垂れ気味で、長い睫毛が周りを覆っていた。

鼻は小さく、鼻筋はすっきりとしている。唇は少し薄い印象を受けるが、それが男らしくもあった。

あるべき場所に、寸分の狂いもなく顔のパーツがある。そして何より、小顔だ。

リツカと名乗る猫獣人の青年が、絶えずにこやかに笑いかけてくれている。

これまでの人生で恋とは無縁であった私は、すっかり魅了されてしまつて。いとも簡単に絆され、ほんのりと頬を熱くしたのだった。

獣人は獣の特徴を体に持つ種族だ。

獣耳であつたり、尻尾であつたり。鋭い牙であつたり、角であつたり。その特徴は種族によって違うが、総じて皆、ヒト族より体が丈夫だ。

人間より俊敏な身のこなしをしていて、人間より力が強い。そん

な獣人達は、知恵を持ち順応する生き物である人間と、遥か昔から共存してきた。

魔物の被害によって朽ち逝こうとしていた獣人の集落を人間の知恵で助け、獣人はその強靱な肉体を使って魔物を駆逐する。

双方の足りない部分を補いながら、ヒト族と獣人族は支え合って生きてきた。

やがて魔物討伐に報酬を出し、魔物を狩る者達へのサポートをする『ギルド』というものが出来てからは、なかなか人里に出て来なかった獣人達も街中まちなかに足を運ぶようになっていった。

そのことによつて現在では、人間と獣人は接する機会が増え、獣人を街中まちなかで見かけることも珍しくはなくなった。

だから、ギルドのマッチングサービスで獣人を紹介されても、ちよつと驚くだけで済むのだ。

冒険者の仕事は受ける人によって様々だ。

繁殖力の高い小型の魔物を日常的に狩ってコツコツとお金を稼ぐ者、危険な大型の魔物を狩ってドカンと大儲けする者。

判別の難しい薬草を採集して納品する者、戦闘能力の無い採集者の身を守る者――

私とリツカは、後半の二つに該当する。

私の両親は田舎の村で薬師をしている、薬草オタクだ。

だから実家には貴重な薬草図鑑がゴロゴロ転がっていて。私はそれを、絵本がわりに読んで成長した。

何冊も何冊も、読み込んで。両親の解説付きで薬草について学んでは、母と一緒に山に入って実地で知識の照らし合わせもしていた。

要するに私は、意図せず何百もの薬草の特徴を丸暗記してしまった

た上に、実務経験までついたのである。

そしてそれは——外の世界を夢見る少女に、村を飛び出す決心をさせるきっかけになった。

しかし現実は甘くない。最初に移り住んだ街で私は、タチの悪いギルドに悩まされることとなった。

生活を切り詰めて、少ない報酬金をどうにか貯めて。一大決心のもとに移り住んだ街にあったギルドは——崇め奉りたくなるほど、良心的で善良な組織であった。

そんなキルドに紹介されたのは、猫獣人のリツカ。

隠密行動と狩りが得意な、大切な相棒だ。

早いもので、もう一年の付き合いになる。

一昨日から丸二日かけて採集に上った山でも、大変頼りになった。彼のおかげで、希少な薬草の採集を済ますことができたのだ。

ギルドが色を付けて薬草を買い取ってくれたお陰で、懷が温かい。大半をギルドの銀行口座に入金した後、私達は疲れを癒しに有料の大浴場へ行つて——更には奮発して、併設されているマッサージ店も利用した。

今は、その帰り道だ。

横並びで夕暮れ時の街角を歩く私達は、とっても上機嫌。

マッサージの最中には爆睡までしてしまつて。疲れが見事に吹っ飛んだ私ではあるが、それはリツカも同じなのだろう。

歩調を合わせて私の左側を歩く彼の喉からは、ゴロゴロとご機嫌な音が聞こえてきていた。

和やかな空気に包まれたまま二人で向かうのは、同居している冒険者向けの格安物件だ。

格安とは言え一軒家で、細長い外観から狭く見られがちだが、風



呂トイレキッチンダイニング付きで、他に三部屋もある。

左右を似た建物に挟まれているが——意外と壁が厚いのか、お隣さんから物音が聞こえてきたことはない。

「今日の晩ごはんは、魚がいいにやあ」

隣を歩く猫獣人の青年——リツカは、目を細めて口角を上げ、ふにやふにやと笑っていた。

上機嫌に笑う彼の視線の先には屋台があり、その場で魚を炙って調理していた。

表面に塩をまぶされたその焼き魚達は、串に刺した状態で並べられている。

くう、とお腹が鳴った。働いて疲れた体が、空腹を訴えている。

「おいしそお」

艶やかな毛並みをした尻尾が、ゆらゆらと揺れている。

髪の中からぴよこりと出ている獣耳は、ピルピルと忙しく揺れていた。

じゅるり。リツカがヨダレを啜る。

とてつもなく良い香りがしている。お腹が減った。——そんな気持ちもあるが、リツカが欲しいなら食べさせてあげたい。

「買って帰る？」

本心に従ってそう問いかけると、リツカは振り返ってキラリとレモン色の瞳を光らせた。

ピンと立ったお耳がこちらを向いていて、非常に可愛らしい。

しかしそれは一瞬だけで、リツカはすぐに表情を曇らせてしまった。彼は気まずそうにもぞりと身動き、視線を逸らす。

「うにゃ……でも……ご飯前だし……」

頭の上にあるお獣耳が、へたりと垂れる。

確かにこの後ご飯を食べに行く予定だし、屋台の食事は飯処で食べるより割高だ。

でもいつもは節約を心掛けて生活しているのだし、たまにはいいと思う。——そう思って有料浴場やマッサージをやってきた後だが、今日くらいは……いいだろう。

「たまには買い食いもいいじゃない？」

首を傾げて笑いかけると、リツカがまた「うにゃ……」と鳴いた。腕を組み難しい顔をして、食欲と節約とを天秤にかけている。

「うーん……。うーん……」

眉を寄せて目を閉じている姿すら可愛いと感じてしまうのは、私が彼に惚れているからなのだろうか。

彼が目を閉じているのを良いことに、まじまじとその姿を観察する。

(これで、私より年上なんだよなあ……)

背は私より頭一つぶん大きいし、細身ではあるが全身がしなやかな筋肉で覆われている——はずだ。裸を見たことは無いが、そのはずである。

肩幅も私より大きく、骨張った手もまた、私より大きい。

そんな彼はとても穏やかな性格をしており、よく笑う。

うにやうにや言いながら隣で笑っている彼の姿を見ると、どうしても年上であることを忘れて、ただただ可愛いと思ってしまう。

「一個だけ買って、半分こしようか」

「はんぶんこ……」

鞆からお財布を取り出してから、リツカに視線を送る。そして私は、リツカの目を見つめたままゆっくりと瞬いた。

「……♡♡」

するとリツカは、頬や目元をほんのりと赤く染めて、私と同じように視線を合わせたままゆっくりと瞬いた。

じっ、と黄色い瞳が私を見つめて、離れない。

ふにやり。リツカの薄い唇が弧を描き、瞼が綺麗な三日月を描く。

「はんぶんこにするにゃあ♡」

グーにした手で頬をコシコシと擦りながら、リツカは照れてはにかむ。そんな可愛らしい彼の姿を見て、私は鼻の奥に痛みを感じた。

「ぐ……」

がおい。危うく鼻血を吹くところだった。

「うにゃあ？」

鼻に手を当てて顔を上向ける。そんな私を前にして、リツカが不思議そうに首を傾げていた。

「セレン？どうしたの？具合が悪いの？」

私の周りをリツカがちよろちよろあたふたと動き回る。

何か返そうにも、気を抜くと鼻血が垂れてきそう。私は空を仰いだまま、じっと固まっていた。

「セレン」

「ぐう……」

心配そうに名前を呼ばれ、腕を優しく擦られた。

揺れるリツカの瞳が上から私を見下ろす。見目麗しい顔がすぐ傍に迫っていた。

（落ち着け、落ち着け……）

自分に言い聞かせ、深呼吸を繰り返す。そうして私は吹き出しそうになる鼻血を、死に物狂いで抑えた。

「だいじょうぶだから……」

鼻を摘まみ、ゆっくりと顔を下げる。

リツカを見ると、黄水晶——シトリンのような輝きを放つ瞳が、  
滲んだ涙で濡れていた。

「ほんとうに？」

「うん」

安心させるために、私は彼の瞳を見つめて大きく首肯する。

しかし真正面から私の顔を目視したリツカの瞼が、何故だか大きく見開かれていく。口も大きく開き、尖った牙が露になった。

「リツカ？」

わなわなと震える唇を目にして、嫌な予感が過る。

だから声をかけたのだが——残念ながら彼の暴走を止めることは、出来なかった。

「た、大変にやあゝ！ セレンのお顔がまっかつか！ 今すぐおうちに帰るにやあゝ！」

「おわっ!？」

ムンズツと右の手首を掴まれて。私の口から、乙女にしては可愛げが無さすぎる声が出た。

すぐに腕を引かれて、つんのめる。普段の可愛らしさからは想像もつかないほどの、力強さだった。

「まって！リツカ！待ってってば！」

「うにゃあゝ！」

パニック状態となったリツカはお耳をピンと立てて外側に向け、全身の毛を逆立てている。尻尾なんてぼふぼふだ。

帰宅を嫌がる散歩中の犬の如く踏ん張る私をもとめせず、彼は借家への道を突き進み始めた。

「リツカ！リツカ！違うから！体調が悪いわけじゃないから！」

引っ張られながら誤解を解こうとするも、うにゃー！と叫んでい



るリツカの足は止まらない。

「ねえ、お魚食べるんでしょ!？」

一旦落ち着いてもらうために食べ物で釣ろうとするが、リツカは勢い良く頭をブンブンと振って。石畳の上をズンズンと突き進む。

「うんにゃー！それよりセレンが大事だからすぐにおうちに帰るのにゃー！」

「おおぅ……」

私は激しくトキメク胸を自由な左手で押さえた。

甘く締め付けられる胸に翻弄され、抵抗することを忘れてしまう。結局そのまま私は、ふんふんと鼻息荒く大股で進むリツカに、家まで連行されたのだった。

場所が変わって自宅の私室。

引っ張られて慌ただしく帰宅した私は、ベッドに寝かされている。今はあれこれと世話を焼かれた後で、お行儀が悪いことに寝たまま保存食を食べさせられた。

リツカも私の後に干し肉をモゴモゴと食べていたので、お腹が満たされていることだろう。

夕陽が差し込む静かな室内に、二人きり。

普通ならば穏やかな時間が流れていることだろう。

しかし今は、リツカから悲壮感たっぷりの空気が放たれていた。

汚れるからと制止したものの言うことを聞かず。彼は床に膝をついて、私の手を握っている。

そんなリツカは眉をハの字に下げて、私に「痛いところはない？」

「辛いところはない？」としきりに問いかけている。

耳も尻尾も目尻も。力無く垂らしているのが可哀想であり、抱き締めたくなるほどに愛おしい。

「セレン、セレン。ごめんじゃあ……体調が悪いのに気付いてあげられなくて……」

リツカは、ウルウルと瞳を潤ませて泣きそうになっていた。体調が悪いと勘違いされている私より、彼の方が辛そうだ。

「あのね、リツカ。私元気よ？どこも悪くなんてないからね？」

「セレン……無理しにやくていいから……」

どうにか誤解を解きたいのだが——彼は私が無理をしていると完全に、思い込んでしまっているようだ。

暖かな両手でぎゅっと右手を包み込まれていて、心地好い。

『もうこのままでも良いのでは』と邪な気持ちで鎌首をもたげるが、

私は慌てて頭を振った。

心配して暴走しているリツカをそのまま放置して自分だけ良い思  
いをするなんて、あまりにも非道だ。

「あのね、リツカ。本当に私は……」

「セレンがいなくなったらどうしよう……」

とうとう綺麗なおめめから、透明な滴が零れ落ちてしまった。

ぽたりぽたりと肌を打つ雫が、私の手の甲に小さな水溜まりを作  
る。ほんのりと温かい滴を受け続ける私の心の中に、大袈裟な、と  
か。過保護過ぎる、なんて。そんな気持ちが僅かに生まれて、あつ  
さりと悦びと高揚に上塗りされた。

「せれん……」

「……」

さめざめと泣くリツカを前に、私は真顔になっていた。

心の内で暴れ回るのは激しい恋慕と、彼の全てを自分のものにしたいという渴望。

「……っ」

私は何か言おうとして、何も言えなかった。

激情の中では言葉など生まれないのだと、初めて知る。

彼の滑らかな頬が、長い睫毛が、涙で濡れている。

美しい光景に見惚れていると、リツカは私の手の平にスリスリと頬擦りをし始めた。彼の涙で肌が濡れても、まるで不快感がない。

「ん……」

堪らなく愛おしくて。ついつい指先で髪の毛の生え際辺りを撫でると、彼は閉じていた瞼をピクリと震わせた。

ゆっくりと瞼が押し上げられて、現れた瞳が私を捉える。濡れたレモンの瞳は、清涼な夏を思わせた。

「セレン……」

薄い唇がゆっくりと動き、私の名前を呼ぶ。

チラリと覗く尖った牙がどこか扇情的で、頭がくらりとした。

（だめだ、好きだ……）

何が駄目なのかは分からない。

けれど私は、今。彼のことかどうしようもなく好きなのだと、思  
い知らされた。

理性的であろうと、照れ屋な彼を待とうと、ずっと思っていた。  
けれど、こんなに好きなのに、彼の気持ちだって分かっているの  
に——これ以上触れ合えないことが酷くもどかしい。

（もういい。襲ってしまおう）

いい加減、焦れてしまつて。私はふしだらな女のフリでもして、  
襲ってしまうことにした。

「リツカ、一緒に寝よう？」

俯いて静かに涙を流すリツカの顔を、下から覗き込む。

「え……？」

驚きから大きく見開かれる瞳をじっと見つめて、私はわざと眉尻を下げる。

不安そうに見えるように。誰かの支えが必要なようにと、猫をかぶるのだ。

「やっぱり、具合が悪い気がするから」  
嘘をついた途端、罪悪感に襲われる。

胸にチクリとした痛みが走り、私は視線を落とした。

今の今まで見つめていた瞳を、直視することが出来ない。

己の小心さを呪いつつ、私はグラグラと決心を揺らがせた。

やっぱりこんなことは止めようかと迷って——開きかけた口をど

うにか閉じる。ここで引き返せば、後悔すると分かっていた。

だから今はそんな葛藤から目を逸らして、本能のままに行動する。ずるいやり方で、リツカとの距離を縮めるのだ。

「そっ、そっか……。なら仕方ないにや……。？」

言外に心細いから添い寝をしてほしいと言ったのが、伝わったようだった。

リツカはおずおずと頷くも、納得しきれていないのか、キョトンとした顔で小首を傾げている。

「じゃあ、こっちにきて？」

掛け布団を捲って、空いているスペースをポンポンと叩く。

リツカはキラキラと輝く真ん丸の瞳で、それを見つめていた。

「うなあ……。？」

まだ状況を理解できていないのか、リツカは緩慢な動作で反対側



に首を傾げる。

どうやら思考停止しているようだ。そんなリツカに、思わず苦い笑みか零れた。

「ほら、早く」

「にっ」

せっついて腕を引っ張れば、大した抵抗もなくリツカの体がこちらに倒れてきた。

咄嗟に私の顔の横に手をついたリツカが、バランスを崩した体を支える。

上体がベッドの上に乗り出していて、まるで押し倒されているみたいだ。近付いた距離に、心臓がドキドキと早鐘を打つ。

「あわ、あ……」

遅れてこの状態を理解したリツカが、じわじわと顔を赤く染めて

いく。あつという間に彼は、首まで真っ赤になってしまった。

慌てて身を起こそうとしている気配を察し、私は背中に手を回す。

「ダメ」

「え、え……？」

ぎゅううつと強く抱き締めて、捕まえる。

彼の方が私より力が強いので振り払うことも出来るだろうに。抵抗せずじっと捕まってくれているのが嬉しかった。

「——うにやつ!？」

わざとリツカの胸板に乳房を押し付けてみると、彼は分かりやすく狼狽した。

思いの外厚みのある体を抱き締めて、むにゆりと胸を潰す。

「せ、セレン、あの、その……」

「ね？一緒に寝よう？」

「ぶにゃっ!?! いや、その、セレンんゝ……」

甘く囁きながら背中を撫でると、リツカのしなやかな体がビクリと跳ねた。

私はしろどもどろになっているリツカの首筋にピタリと頬を張り付けて、今度は優しく彼の腰を撫でる。

「よしよし」

「う、うにゃ……♡」

尻尾の付け根の辺りを右手の指先で撫で、ぐっ、ぐっ、と断続的に押してマッサージをしてやる。すると途端に、リツカの声色が甘くなった。

「よしよし♡」

「ううん……♡」

そんなリツカが可愛くて、反対の手で後頭部をさわさわと撫でれ

ば。彼はほうつと温かな息をついて、強張っていた体から力を抜いた。抵抗する気が削がれたようだ。

「ううっ♡うにゃあ……♡」

今度はマッサージを続けながら、左手でするすると尻尾を擦る。するとリツカはふりと震え、更に脱力した。

「気持ちいいの？」

私は右手を彼の背中に添えて、そつと囁く。

筒状にした手で尻尾をしゅるりしゅるりと擦り続けている内に、リツカの体はビクビクと跳ね始めた。

「うにゃあ……♡きもちいい……♡」

くたり。よりリツカの体から力が抜け、重みがのしかかる。

「よいしょ……セレンっ♡」

「んっ」

不意にぼすりと、胸元に顔を埋められる。僅かに羞恥心が湧き上がった私は、尻尾を愛でる手を止めてしまった。

しかしすぐに、気を取り直して。私は自分の胸に頬を擦り寄せ、赤ん坊のように甘えてくるリツカの頭を優しく撫で始めた。

「んんう……♡せれんう♡」

更に左手でしゅるり、しゅるりと尻尾を可愛がり続けていると、その手にくるんとリツカの尻尾が巻き付いた。

ゴロゴロと白い喉が鳴っている。甘えてくるリツカに目を細めながら、私は頃合いだろうと判断してもう一度口を開いた。

「ね？お願い、リツカ。一緒に寝よう？」

トントン、トントンと。彼の尻尾に捕まっている手で根元を優しく叩きながら、私はおねだりをする。

私の胸に右頬をくっつけているリツカは、こちらを見上げながら

絶えず喉を鳴らし続けていた。

「うにゃあ……♡一緒に寝るにゃあ……♡」

「ん、ありがとう♡」

頷いて身を起こしたリツカが、ベッドの上に這い上がってくる。

彼はギンギシとベッドを軋ませながら私の体を跨ぎ、顔の位置を合わせた。

そうしてリツカは甘えた声でうにゃうにゃ鳴きながら、私の頬に頬擦りを始めた。ヒトと違って口髭が生えない彼の頬は、いつだつてスベスベだ。

「セレン♡セレン♡」

「ん……♡リツカ♡」

スリスリ、スリスリと頬同士を擦り合わせて、リツカはぎゅううと強く私の体を抱き締めた。

くんくん。髪の毛の匂いを嗅がれて、思わず顔が熱くなる。

「んなぁ……♡良い香り♡♡」

くんくん。くんくん。頬を、首筋を、耳の裏を嗅がれる。

意外なことに——太腿に、硬いものが当たっていた。

「セレン♡せれん♡♡」

「あっ♡こら♡」

ペロリと顎を舐められて、可愛いお耳ごとくしやりとリツカの頭を掻き混ぜる。

ゴリゴリ。太腿に雄の象徴を押し付けられて、私は興奮から熱の籠もった息を吐き出した。

「仕返ししちやおうかなぁ♡」

反応してくれていることが嬉しくて。大胆になった私は、完全に勃起上がっているリツカのそれに、右手で触れてみた。

服越しでも分かる熱と硬さにドキリとしながら、手の甲でそろりと撫でてみる。

「あうっ♡」

ビクリとリツカの腰が跳ねて、手の甲に触れている熱も、大きく跳ね上がった。尚もドキドキと鼓動が跳ね、ジクリとした熱が下腹部に集まっていくな。

「せれんのえっち……♡」

照れたように伏せ目がちになり、視線を逸らすリツカ。そんな彼の腰が、ゆらゆらと揺れている。体は正直、というやつだ。

きつと私の口許には、淫らな笑みが浮かんでいることだろう。

そうと自覚しながら私は手首を捻り、そつと、リツカの熱を握ってみる。

触れてもいない下半身には、どんどんと熱が蓄積していく。



「あっ♡あっ♡セレンっ♡セレン♡」

服越しに握った怒張を緩く擦る。そうすればリツカは、腰を戦慄かせた。

彼は抵抗すること無くこちらを見上げ、私の胸元に口元を埋める。そうして服の上からその膨らみに、ちゅっ♡ちゅっ♡と口付けるのだ。

「ああ、リツカ♡♡」

胸がいつぱいになって、片手でリツカの体を抱き寄せる。

きゅん♡きゅん♡奥が疼いて、甘い痺れを生んでいる。

私は焦燥感に似た逸る気持ちをグツと抑え込んだ。

そしてこちらに縋り付きながらカクカクと腰を振るリツカの体を受け止め、左手で柔らかな毛髪を撫でるのだ。

「気持ち良いの？♡」

「うん♡気持ちいいにゃ……♡」

コクコクと何度も頷くリツカは、口で柔らかい乳房の感触を楽しんでいるようだ。胸を唇でふにふにと押される感触に私はクスリと笑い、首を傾げる。

「リツカ、少し顔を上げてくれる？」

「??」

お願いすれば、素直にきいてくれる。そんな彼にお礼を言って、私は自分の胸元に両手を寄せた。

「……♡♡」

プツリ。着ているシャツのボタンを外せば、その意図が伝わったのだろう。

リツカは瞳が零れ落ちんばかりに目を見開き、縦長の瞳孔をも開いた。

「うにゃあ♡♡」

少しずつ露わになっていく私の肌から、リツカは一瞬たりとも視線を外さない。ボタンが外れる毎にどんどん興奮を高めていつている様子で、レモン色の瞳を爛々と輝かせていた。

お腹に密着している彼の胸板からは速い鼓動が伝わってきている。リツカは大きく口を開き、牙をちらつかせながら薄い唇を震わせていた。

プツリ。上体を反らした彼の協力のもと、最後のボタンを外し終えて。私は着ていたシャツを左右に開き――

「せれんんっ♡♡」

「きゃっ!？」

下着を曝した瞬間、勢い良く飛びつかれた。

「んっ♡あっ♡そんな、いきなりっ♡はあっ♡」

ちゅっ♡ざりざり♡ぺろぺろ♡ちゅうつ♡

私の胸元に顔を埋めたリツカが、露になっている乳房の上部分に舌を這わせ、吸い付く。ザリザリとした舌の感触が気持ち良くて、いきなりのことであつたのに私はつい、感じ入ってしまった。突然のことに驚いたけれど、夢中で口付けられて嫌な気はしない。私はそつと、艶のある髪を指で梳いた。

「にゃああ♡うなああ♡♡」

「んっ♡んっ♡」

酔ったような声を出しながら、きつく抱き着いてくるリツカ。ぺろぺろ、ぺろぺろ♡と執拗に肌を舐められて、ビクリビクリと体が跳ねる。

「セレン♡せれんん♡♡」

「あっ♡はあ、リツカ♡」

胸元を舐めしゃぶられていると、右足にリツカの両足が絡み付いた。反対の足の太腿には、尻尾が巻き付く。

「あっ♡ん……っ♡」

与えられている快楽は僅かなものである筈なのに、ザラザラとした舌に肌を撫でられ続けていると、少しずつ息が上がってくる。

この舌で胸の先端を舐められたら、どれほど気持ちが良いのだろう。そんな淫らな妄想に、奥がキュン♡と疼いた。

「リツカ、もっとおっぱい舐めたい？♡」

「……！うん、うん！」

獣耳の根本を優しく撫でながら問いかけると、リツカは勢い良くガバリと顔を上げて、何度も頷いた。

その姿に私は笑みを零し、胸元を覆う下着に指をかける。

「はっ、はっ♡」

リツカの息が荒い。素肌に熱い吐息がかかって、ぶるりと全身が震えた。ぐいつ、と指で下着を引っ張ると、リツカの目前にぷるりと現れる桃色の突起。

「はあっ♡はあっ♡」

熱い息を至近距離で浴びせられて、胸の先が硬く立ち上がる。

「はっ、はっ、はっ♡」

じっとその突起を見つめたまま動かない姿はまるで、待てを言い渡された犬のようだった。猫なのに犬みたいなのがおかしくて、それもまた愛おいしい。

「舐めたい？」

「舐めたい！」

間髪入れずに返ってきた言葉に、また笑みが零れる。

思っていたよりもリツカは、エッチなことに興味があるようだ。

「どうしよっかな……?」

もちろん舐めてくれて構わない——いいや、舐めてほしいのだけ  
れど。今は焦らしてみる。

下着をずり下げた後私は、自ら乳首に指を這わせ、きゅっ♡と摘  
み上げた。

「ん……♡」

「あ、あ、あっ♡」

甘い快楽に息をつめれば、そこへ釘付けになっているリツカが、  
私の代わりに喘いだ。

「んっ♡んんっ♡」

「はあッ♡♡はあッ♡♡」

リツカに凝視されたまま、胸の先を刺激する。

じわり、じわりと快感が溜まり——私はリツカに捕まってい

まり動かせない足を、気持ち程度に擦り合わせた。

「んんっ♡あっ♡おっぱい、きもちい……♡」

「あっ♡ああっ♡セレンのおっぱい、舐めたいにやあ♡♡舐めたいにやあっ！舐めさせて♡♡お願いだから、舐めさせてえ！」

舐めたい舐めたいと連呼するリツカの前で、にんまりと笑って。

私は勿体つけた緩慢な動作で、上半身の服を全て取り払う。

下はまだ履いているとは言え、リツカの前で肌を晒しているというのに、羞恥心より興奮が勝っていた。

「もうちょつと、我慢して？ね、お願い♡」

「ううう……」

小首を傾げておねだりすれば、彼はしょんぼりとした表情を顔に浮かべながらも、素直に首肯した。

下から持ち上げるようにして乳房に手を当てて、両手でぎゅっ♡



と胸の先を摘む。

「んっ♡」

「はあう……♡」

やはり私よりも、リツカの方が可愛く喘いだ。

見せつけるように乳首を指先で潰し、そこを凝視するリツカを見つめながら、口を開けて湿った吐息を漏らす。

「あっ♡ああ……♡」

「はあっ、はあっ……！セレン♡セレンセレンセレン♡♡」  
きゅっ♡きゅっ♡グリグリ♡

指先で先端を捏ね回せば、気持ちいいのがどんどん増えていく。

じわじわと足の間が濡れる感触があり、私は僅かに腰を浮かせた。

——ゴリッ♡

「……あっ♡」

意図せずリツカのものに、自分の股座を押し付けてしまった。流石に気恥ずかしさを覚えた私は、反射的に赤面する。

「セレン可愛い……♡可愛いにゃあ♡♡」

「んっ！あッ♡あ、ふ……っ♡」

きつと許可が出たと思ったのだろう。リツカは腰を揺らし、私の割れ目にグリグリ♡と剛直を擦りつけ始めた。

「……こーら♡だめよ？」

私は慌てて彼の胸板に右手を当て、待ったをかける。

しかし大きな体を押し返そうとしても、ビクともしなかった。

そろそろ待ての限界なのかもしれない。元よりリツカは、待てが得意な犬ではないのだ。

「ねえ、ほら♡こっち……見て？」

私は刺激したことによりぽってりと赤く腫れている胸の先を、左

右同時に摘まむ。そして見せつけるように、少しだけ引き伸ばした。

「ん、んんっ♡」

「はあッ、はあ……ッ!!」

獣のような呼吸を繰り返し、喉をグルルと鳴らすリツカ。

そんな彼の目前では赤く熟れた二つの果実が、次の刺激を今か今かと待ち侘びている。

秘部に押し付けられている怒張は、はち切れんばかりに膨れ上がり、ビクビクと震えていた。

——これ以上焦らすのは、酷だろう。

真っ赤になっているリツカの綺麗な顔を見上げ、私は優しく微笑みかけた。

「ちゃんと待てて、リツカはえらいね♡ほら、ご褒美あげる♡」  
クリ、クリ……♡見せつけるように先端を弄っていると、開いた

ままのリツカの口からトロリと、唾液が落ちてきた。

「ご、ほうび」

顎を伝い、私の胸へと落ちてくる唾液はほのかに温かい。

ヨダレを垂らしたことに気付いていない様子のリツカは、口を閉じるとゴクリと喉を鳴らした。

「そう、ご褒美。ほしいでしょう？」

私は右手だけ乳房から離すと、肌に落ちたリツカの唾液を指先で掬う。そしてそれから――じつと指先を凝視しているリツカの目前で、私は掬った唾液をゆっくりと、胸の先に塗りつけていった。

「あっ、あっ」

割れ目に押し付けられている熱が、大きく跳ね回っている。

ジリジリと肌が焼けてしまいそうなほど強い視線を向けられながら、ゆったりと、しかしねっとり。私はリツカの唾液を、乳首に

染み込ませた。

「あら、もう乾いちゃった」

微量の唾液はすぐに肌に染み渡り、ぬめりが無くなる。

胸元から視線を上げリツカの顔を見ると、彼は目を血走らせて自分の唾液を吸収した胸の先端を凝視していた。

「ほら、もう我慢はしなくていいのよ？　いつまでも固まっていなくて、好きなだけここを舐めると——んんッ！♡」

言い終える前にペロリと先端を舐められて、言葉が途切れる。

ペロリ、ペロリ。リツカは無言で熱い舌を使い、胸の先を舐め上げる。

ぺろっ♡ぺろっ♡ざりッ♡

「んっ♡んうっ♡」

リツカの舌は先端はスベスベでも、真ん中の辺りはザラリとして

いた。

猫らしいトゲ付きの舌だ。でも獣の猫より、トゲが柔らかい。

敏感な場所をそのぬめったザラザラの舌に擦られるのが、とても気持ちいい。

リツカのシャツを握ってその快楽を甘受していると、勝手にゆらゆらと腰が揺れた。

「ぐんッ！う、あっ♡はあ、はっ♡」

ぢゅっ♡ざりざりざり♡ぢゅるっ♡グリグリ♡

片方を舐めしゃぶられながら、反対は指先で可愛がられる。

夢中で愛撫を繰り返すリツカは、熱い息を吐きながらも、ひたすらに無言だった。

私が誘惑しすぎたせいで、興奮が臨界点を越えたのかもしれない。

「あっ♡ああっ♡んっ♡ふう♡」

胸の先を弄っていた手が、そろりそろりと肌を撫でながら下りていく。服の上から下っ腹の更にその下を撫でられて、今になって気恥ずかしさが湧き上がった。

「んっ♡はあっ♡んん……っ♡」

ちゅうちゅうと胸の先を吸われながら、下腹部——子宮の上辺りを優しく撫でられる。

『初体験』『痛いのかな』などと、今更な不安が顔を覗かせた。

でもこの状況で冷静になるのは、得策ではない。

そう自分に言い聞かせて、私は首を横に振る。

——すると、それまでずっと黙っていたリツカが口を開いた。

「嫌？」

片眉を上げ、目を眇めている表情が珍しい。

リツカのこんな表情、見たことがない。

「違う。今更だけど初めてだから、ちょっとだけ怖くなってしまった」

「ああ、なるほど……」

ムードを壊しそうだから黙っているつもりだったが、怪訝な表情を向けられれば隠すのは得策だと思えなかった。

続いて決して嫌なわけではないと伝えようと、リツカはいつものようにふにやりと笑って、ぺろりと私の胸の先を舐め上げた。

「だーいじょーぶにやあ♡ものすっごく優しくするから、心配いらないよお♡♡」

「んっ♡……あっ♡」

服の上から割れ目をなぞられて、甘えた声が出る。

「ぐっちやぐちやだにやあ♡」

「は、はずかし……♡」



ぐっしよりと濡れそぼっている下着の上から指を這わされて、いやらしい音が鳴り響く。いつの間にか主導権は、リツカの手に握られていた。

「んっ♡あぁっ♡あっ♡」

粘ついた音を立てながら、指で入り口を擦られる。

胸を弄られるのはまた違った刺激に、勝手に腰が震えた。

「ここ、硬くなってるにゃあ♡」

「——あッ！あうっ♡あぁっ♡」

指先でピンツ、ピンツ♡と、割れ目の上の突起——クリトリスを弾かれている。脳天に突き抜けた分かりやすい快楽に勝手に腰が揺れて、止められない。

「よしよし♡」

「あっ♡あっ♡ンツ♡」

小さいながらも膨張した突起を、リツカは指先で優しく撫でる。そうしてスリスリさすさすしながら、彼は体を起こした。

「ちよっと待っててにゃあ♡」

「おッ♡あっ♡ああっ♡おッ♡♡」

こすこすこすっ♡♡一際速く、強く。

リツカは刺激に喜んで大きくなっているクリトリスを撫でると、最後に優しくトントンと叩いてから手を離れた。

そして静かに、服を脱ぎ始める。

「はあ、はあっ……」

目を閉じてパサリパサリと音を立てて布が落ちていく音を聞きながら、私は燦る熱に堪えていた。

ジンジンと疼くクリトリスが、次の刺激を待ち侘びている。

「さ、セレンも脱ごうね」

「ん……」

ズボンのウエスト部分を握られて、目を開ける。視界に入ってきた綺麗なリツカの裸体から、私は咄嗟に目を逸した。

けれどどうしても気になってしまつて。私はチラチラとリツカの体に視線を向けながら、腰を上げる。

「んっしょ」

下着ごとズボンを引き抜かれて、僅かに頬が熱くなった。

再びリツカが、仰向けに寝転ぶ私の上に覆い被さってくる。

先ほどとは違い今度はお互い全裸だ。触れ合うところがどこもかしこも熱い。

リツカの肌はすべてすべて気持ち良く、その肉体はしなやかな筋肉に覆われていて、とても美しかった。

「セレン……」

そっと顔を寄せられて、目を閉じる。

ふにっと唇に柔らかい感触が触れて、私は秘かに高揚した。

彼の両手が乳房を優しく掴み、尖った先端をあやす。

「ん、リツカ……」

ふにふにと唇に押し当てられる柔らかな感触。

リツカと口付けていると実感して、心臓が暴れ回る。

それでも私はリツカの首に腕を回して、彼を抱き寄せた。

更には触り心地の良い髪を撫で、頭の上に生えている耳の根本を

指先で撥る。

「んっ♡セレン♡んむっ♡セレンッ♡」

リツカは私の下唇に吸い付き、ザラザラとした舌で唇の表面を舐めていた。思いの外積極的なリツカに多少押されながらも、私は必死についていく。

「んっ？ん、んんっ♡」

口内に彼の舌が潜り込み、驚いて。私は一瞬だけ動きを止めた。熱い舌で内頬をゾリゾリと舐められ、のし掛かられる。

口内に走る刺激や口許に感じる熱い吐息に——私はされるがままになって、パチパチと瞬きを繰り返した。

「ふーっ♡ふう、ふっ♡はあっ♡」

「あ……、んむ、んっ♡」

熱烈に貪られるせいで口をもごつかせていた私だが、やがて思考が追い付いた。我に返ってからは、こちらからも彼の舌を舐める。

今やリツカの体はこちらにグイグイと押し付けられていて、私の体はしきりに揺れていた。

胸を弄る手は忙しくあちこちに移動して、私の体を撫で回す。

私はゾクゾクと背筋が上がっていく刺激に、内腿を震わせていた。

「せれん、せれん♡♡♡」

「あふっ♡ふぁ、んん……っ♡んう、んっ♡」

リツカは器用に舌を動かして私の舌を捕まえ、舐め上げる。

そんな彼の口からはトロトロと唾液が流れて来ていて、私は度々それを飲み下していた。

（なんだか、甘い……？）

リツカの唾液も、彼から放たれるにおいも。

獣人の彼は元々、私よりもうんと体温が高い。

けれど今触れている彼の体は、燃えるように熱くなっていた。

（そういえば獣人は発情すると、体温や体臭とか色々なところに、変化が出るとか……）

リツカとペアになってすぐの頃、彼に失礼が無いようにとこっそり獣人について調べた。

たくさん読み漁った本には獣人の発情——ヒートについて書いてあつて。一度ヒートを起こすと、無闇に放置することで身体的にも精神的にも負担が生じると書いてあつたのだ。

彼を発情させてしまったなら、きちんと責任を取らないと——と。そう考えて、私は彼の尖った牙をぺろりと舐めた。

しかしそれからすぐに、口付けがほどかれる。

「ねえ、考え事はやめて」

「あんツ！ あ——」

思考に耽っていたことに、気付かれてしまったのだろう。キュツ♡と胸の先を押し潰して咎められ、私はハツとした。

視線を上げると、じつとりと見つめられていると気付く。

私は自分のやらかしを自覚して、ほんのりと苦く笑った。

「ごめんね、もう余計なことは考えないよ。ね、許して？」

「ん……」

自分のものより薄い唇を吸って、頭と背中を撫でて。私はどうかご機嫌を取る。

するとリツカは僅かな間だけ目を眇め——それからいつもの調子でにっこりと、笑ってみせた。

「しょうがないにゃあ♡許してあげる♡」

「ん、ふ……っ♡」

ちゅ、ちゅ、と立て続けに唇を吸われたと思えば、今度はパクリと食らい付かれる。

いつもは穏やかで優しいリツカだが、発情してるからか今は物凄く大胆になっているようだ。

再び私はトゲ付きの舌で、口内をベロベロに舐め回されることになった。



「しゅき、せれん……♡らいしゅき……♡」

「ふ……♡ふう、んんっ♡」

私達は口付けに没頭し、夢中で舌を絡ませ合う。

乳首がコロコロと指の腹で転がされていて、割れ目には熱いものが押し立てられている。

頭から爪先まで全てドロドロに溶けてしまいそんな感覚の中で、私は必死に口付けを返していた。

「あっ、……んう♡」

「んふ……っ♡」

彼の口内に舌を差し込むと、舌尖を噛まれてしまった。

ちよつとびっくりしたものの、痛みはない。きつとわざと噛んだのだろう。

思わず見開いた視界の中で、レモン色の双眸が目尻を垂らしなが

ら私を見ている。

「えへへっ♡♡」

「あん、ん……ッ♡」

噛んだところをあやすように、やたらとねちっこく舐め回される。それに目を細めれば、ぢゆるるっ♡と音を立てながら舌を吸われた。

「ひゃあっ♡んあ、あ……っ♡」

ゆったりと私の乳房を揉んでいた熱い手が、スリッ♡と乳首を撫でてから離れていった。

そろそろとリツカの熱い手が体に這って、下りていく。

「あっ♡あっ♡リツカ……♡」

「ん、セレン♡」

その手が向かう場所は、一箇所しかない。そう察して体が勝手に期待で震え、足がピクピクと跳ねる。

悪戯に刺激されてからずっと放置されている下の突起が、途端に疼き出した。

「ああッ♡」

「ん、すごい……♡」

ぐしょぐしょに濡れそぼっている秘裂に、リツカの手が触れた。

——今度は布越しじゃない。直接だ。

私はゴクリと生唾を飲み下して、触れる感触に集中した。

普段の仕草や態度でつい可愛いと思いがちだが、実際のところリ

ツカは、背の高い成人男性——しかも私より年上だ。

体に見合った大きさの骨張った手でにゆるにゆると擦られるだけで、そこが気持ちよくなってしまう。

それにしても音が凄い。グチグチと音が鳴ってしまつて、私は非常にはずかしかった。

「んっ♡あっ♡あの、リツカ、んっ♡」

「ん？どうしたの？」

クリトリスもビラビラも入り口も、大きな手でごしゅごしゅと擦られながら、どうにか言葉を紡ぐ。

しかし首を傾げて小さく微笑むリツカは、壮絶な色気を纏っていた。そのせいで私は、思わず押し黙る。

——なんだかいつものリツカと違う。漠然とそう、感じて。

ごくりと生唾を飲むと、私はじっとレモン色の瞳を見つめた。

「んん？何かあった？——……のかにやーっ？」

「あ……う、ううん！」

甘い声でにゃーと泣いてにこにここと笑うリツカは、私の知っているいつものリツカだ。

私はホッと胸を撫で下ろして、緊張を解く。

そしてこういう状況だから、ちよつと真面目な態度になっていたのかなと一人で納得した。

「えっと、……さっきも話したけど、初めてだから優しくしてね？」

「あ……♡うふふ♡うん♡」

おかしい空気にならないためにも、改めて『初めて』だと明かす。するとリツカはキョトンと目を丸くして。それから、蕩けるように笑った。

ちゅっ♡と私の唇を吸ったリツカに、じいっと瞳の奥を覗き込まれる。

「オレが、初めてをもらうね♡セレンのお、一度だけのお、初体験を……♡う、ふふっ♡」

「う、うん……」

大好きなリツカが、楽しそうにしている。それだけなのに、私の

腰は引けてしまっていた。

何故だろうと考えたところで、「開こうね♡」と太ももに触れられる。

「あの、本当に、お手柔らかに、ね……？」

「うん♡はじめて同士、ゆっくりしようね♡」

閉じたくなる足からどうにか力を抜きながら、パチリと瞬く。

そうじゃないかと思っていたが、リツカも未経験らしい。

それを喜ばしく思うのに——やっぱり私は、どこか不安だった。

あのリツカが、おかしなことをするわけがない。

分かっているのに、何故だか逃げ出したくなってしまう。

「もーっと足、開こうねえセレン♡」

「あ、う、うん……」

膝裏に手を当てられて、ググツと足を持ち上げられる。

自分で持って♡と足を持つように促されて、私は素直に従った。  
しかし遅れて、とんでも無い体勢を取ってしまったと気付く。

「り、リツカこれは流石に……えっ!? なんでそんな」

「うにゃあ♡♡すっごおい♡」

私が動揺している間に、リツカは移動していた。

今は俯せの体勢になって、露になっている足のあわいへ、顔を近づけている。

濡れた場所をじっと見つめられていると気づき、私はかあつと顔に熱を集めた。

「すー……はあ……♡いい、香り♡♡」

「……っ、……っ」

その上、においまで嗅がれるだなんて。

私の視界は羞恥で真っ赤に染まり、思考は白く霞んだ。

「てらーっと濡れて光ってて、綺麗だなあ♡セレンはこんなところまで良いにおいがするだなんて、すごいにやあ♡」

「や、やめ、て」

羞恥で悶えながらも、私は必死に言葉を捻り出す。

震える右手で彼の頭に触れれば、ピンと立った耳に指が触れ、ピルピルと揺れる刺激を受けた。

「わかった♡じゃあクンクンはやめるね♡でも、そのかわり……」  
「……え？」

リツカのお口がパカリと開いたと思えば。彼の顔が、ゆうっくりとそこへ近付いて来る。

目の前の光景が信じられなくて。私がただぽかんと見守っていると、やがて——濡れた感触が割れ目を覆った。

「あ……っ!? や、リツカ……!」



「ん、ふん……♡♡」

ちゅるっと音が鳴って、溢れた蜜を啜られたと気付く。

慌てて正気に戻り遅れて制止しようとするが、伸ばした手は再び膝裏を持つようにと促されてしまった。

困惑し、目を泳がせても——私はその指示に従ってしまう。

「ん、んっ♡だめ、汚いよ」

「んーにゃ♡汚くなんかないよ♡すっごく美味しい♡」

「んんん……っ！」

周りに付着した愛液をザラつく猫の舌で舐め取られ、時折入り口をも撥られる。

内側の粘膜を舐めるように舌を動かされればその度に甘い刺激が走って。勝手に腰が、カクカクと震えた。

「ひた、いたくなーい？」

「あ……っ！いい、たく、ないけ、どおっ♡♡」

ゾリゾリと舐められても気持ちいいだけで、寧ろそれに困ってしまふ。止めておけばいいのに正直にそれを伝えた私は、更なる刺激に襲われる。

「じゃあこうして中に、いれへも……♡」

「きゃ、あッ！あああっ！」

にゅぐつと入り口を割って入ってきた塊が、内壁を撫でる。

お腹側はザリザリ。背中側はぬるぬる。二つの刺激に、膣内が甘く痺れた。

「ああ、あッ！あん、あうっ♡」

リツカの舌が、お腹側の内壁をゾリゾリとこそぐ。

浅いところをゾリゾリとされると気持ちがよくて。どうやらそれに、勘付かれてしまったようだ。

弱いところを集中的に擦られて、ビクビクと体が跳ねる。

「そこっ♡だめっ♡りっかあっ♡」

「んふ♡ふーっ♡ふっ♡」

リツカの喉が、グルグルと鳴っている。

それは一緒にリラックスしている時のゴロゴロ音とも違う、獣の唸りじみたものだった。

ヒート常態となった獣人は獣の本能が活性化されると本にあった、だからきつと、そのせいだろう。

「あ、あ、あっ！んあ、アッ♡♡」

繰り返し前後する舌が、蜜壺内でぐじゅぐじゅと酷い音を立てている。

恥ずかしいのに、気持ちが良い。私は頭をクラクラさせながらも必死に、自分の足を抱えていた。

「セレン、可愛い♡♡♡」

「うう、リツカ……あっ！」

話し終わるなり再び蜜口に舌を挿じ込まれて。今度はもっと深いところまで侵入した柔らかな異物に、私は絶えず隘路を掻き混ぜられる。

「ああ、ザラザラが、うんっ♡♡」

「ふふ、ん……♡ぢゅ、んふっ♡」

深いところまでザリザリと舐められていると、奥がキュンキュンと疼き出した。

トロツと入り口から垂れた蜜はしきりに啜られ、そのせいで沸き上がる羞恥心さえ、私の性感を高める。

「ひゃっ!? ああ、くり、だめ……!」

不意にきゅむっ♡とクリトリスを摘ままれて、そのままシコシコ

と上下に扱かれ出した。

腰が砕けてしまいそんな感覚に必死にリツカを止めようとするが、効果は無い。

膝を抱えたまま彼に伸ばした指はサリサリと緑褐色の髪を揺らすだけで、何の抑止力にもならなかった。

「んんん♡♡んんーッ！あっ、あっ！」

「はあ、はあ♡せれ、んん……♡♡」

指でくにゅくにゅとクリトリスを揉まれ、舌でじゅぶじゅぶと膣内を搔き混ぜられる。

二つの刺激が混ざり合い、私を高みまで連れていく。

喘ぎ、呼吸を乱し、体をしきりに跳ねさせて。私は上目にこちらを見つめてくるリツカのレモン色の瞳を、必死に見つめ返していた。瞳孔が僅かに縦長な虹彩。

私はこの瞳が彼の体の中で一番好きで――

見つめられるだけで心が、歓喜で満たされてしまう。

「あ、あッ、ああッ！い、く……っ♡リツカ、イツちゃうっ♡」

「うん、イツて……？んぢゅっ♡ひって、せへんっ♡♡」

コリコリコリッ♡

指に挟まれたクリトリスは、皮で擦るように芯を刺激される。

ゾリゾリ♡ぐぢゅぐぢゅ♡

ザラついている舌で前後に擦られる膣内は、思わず体が跳ねてしまふところばかり、執拗に責められていた。

「いっく♡いく、イい、いっ♡♡♡」

「ふっ♡ぢゅっ♡ふうっ♡グルルッ♡」

皮かむりの芯をゴリゴリされながら、ついに。私は達してしまつた。

ぎゅうっ♡と締まる膣内で、リツカの舌がピクピクと跳ねている。それをつぶさ感じ取りながら、私は忘我の彼方へ意識を飛ばし、カクカクと腰を揺らし続けた。

「はひっ♡おッ♡♡おっ♡♡」

私が絶頂の余韻でぼおっとしている最中にも、クリトリスへの刺激は止まない。

今やガチガチに硬くなっている芯が、指の腹に圧を加えられながら扱かれている。

大きく見開いた視界に映るのは、ご満悦そうに細められた黄色い瞳。

「い、くっ♡いい、くう♡♡♡」

ぞりゅ、ぞりゅ――

動きづらそうにしながらも、彼の舌は先ほど見つけた私の弱点を

撫でる。

外からも、中からも。しつこく性感帯を嬲られる私はしきりにイ  
くと呟き続け、それから何度も何度も、繰り返し果てた。

「……ふう」

「おッ♡♡ほ、お、お……♡」

たっぷりと外も中も愛でられた後、ゆっくりと舌が抜けていった。  
既に数えきれないほど達した今ではもう、私はぐずぐずのドロドロ  
口で、使い物にならない。

散々快楽を教え込まれた蜜壺は啞えるものがなくなってもずっと  
ヒクヒクしていて、入り口がパクパクと開閉を繰り返していた。

嫌になるほど指で弄られたクリトリスは、ジンジンと熱い痺れを  
発している。イきすぎて辛いのに、そこはまた触れてほしいと訴え  
かけているのだ。



「セレン？大丈夫？」

「あ……う？」

スリスリと左頬を撫でられて、私はぱちくりと目を瞬かせる。  
誘われるように声がした方向に視線を向けると、鮮やかなレモン  
があった。

「ふふ、かあわい」

「ふ、ん……？」

優しく唇を吸われて、ザリザリと表面を撫でられる。

もう数回瞬きを繰り返してから辺りを見渡すと、今の私は仰向けの  
常態でリツカに覆い被さられているようだった。

足は開脚したまま、膝を曲げている。だから爪先が宙に浮いて  
いるのだ。

「そろそろ挿れようと思ってるんだけど……」

「はあ、はあ、……んっ？」

何か話しかけられた気がするが、右から左に流れていく。

それに必死に息を整えているのに、度々唇を吸われて邪魔をされる。

顔を背けても追いかけて、べろりと唇を舐め上げられるのだ。その間ずっと、リツカの喉はグルグルと鳴りっぱなし。

「ねえ、セレン。オレ、獣人だからさ。愛するのは世界でたった一人だって、決めてるんだ」

「んんっ！んー……ッ！」

あまりにも彼の口がしつこすぎて。必死にかぶりを振って躲すが、的がずれても構わずペロペロと舐められる。

頬や顎、鼻先に至るまで。話す合間にしつこく舐め回されていた。息を吸おうと口を開けば舌が入り込む始末で、私はほんと困り

果ててしまった。

「オレが種をつけるのも、たった一人だけ。番……って、セレンなら知ってるかな？」

「あ、は、つがい……？」

やっと密着していた顔が離れて、私はホッと息を吐いた。

だからか『番』の単語が耳に入り、首を傾げる。

番、とは。獣人が伴侶として認めた唯一の存在だ。

獣人は一途な種族なので、決して浮気をしない。だからこそ人間を番として認める際には、相手に不義はしないと誓わせるのだ。自分の心を守るために。

しかしながら人間に裏切られて心を壊す獣人は、昔からなかなかいなくならない。

「うん、番。これをいれたら、セレンはオレの番」

「あ……っ」

濡れている割れ目に、ピトリと熱いものが触れた。

ぬるぬると入り口を擦る硬いもの。

ここからだとはよく見えないが、きっとそれが彼の生殖器なのだろう。人間だってその気管は大事だが、獣人である彼のものはもった大切に思えてしまう。不思議なものだ。

「セレン、オレの番になってくれる？」

「リツカ……。リツカの番に、私が……」

きつと、両想いだろうと思っていた。

けれどこの国の冒険者は自由気ままに暮らす人ばかりで、結婚という縛りで身を固める人は稀だ。

だからいつかりツカと恋人関係になるかも——思いながらも、その後のことは想像できていなかった。

私は今になって、リツカと歩む未来を鮮明に思い浮かべる。

するとじんわりと――体の奥底から、歓喜が湧き上がってきた。

「うん。リツカの番になる」

「……ほんとうに？」

しっかりと目を見て頷いたのに、疑われている。

眇められた瞳を前にして、私は静かに首を傾げた。

（なんだかやっぱり、いつものリツカと……雰囲気が違うような）

何より、彼の口癖の「にゃー」が無い。

どうしたのだろうかと見つめ続けていると、薄い唇が開いて尖った牙が見えた。

「絶対に浮気はしないって、約束、出来る？」

「……………」

僅かに開いた縦長の瞳孔。

その変化を目の当たりにしていた私は目を見張って。それから、無言で頷いた。

声が、出なかったのだ。

「……わかった。約束、だからね？ 絶対に破っちゃだめだよ」  
「う、うん」

優しく諭されているだけなのに。

まるで約束を破ったら喉元を噛みきってやるぞと脅されているように——そんな緊迫感があった。

優しいリツカがそんなことするはずないと思うのに、グルルと喉を鳴らした彼からは寧猛な雄の気配を感じる。

「約束できて偉いね、セレン」

「ん……っ」

ザリツと大きく唇を舐め上げられて、私は目を細めた。

強めに舐め上げられたせいで、唇がジリジリと痺れている。

「……ふは。怯えた顔をして、どーしたのかにやあ？ごめんねえ、怖かった？」

「あ……り、リツカ」

いつもの調子でトロリと笑って、コテンと首を傾げる。

その様子は、私がよく知っているリツカそのものだ。

大きく安堵して、私は肩から力を抜いた。

「前置きが長くなってごめんね！さあセレン。お互いの意思確認も出来たし、早速つがいエッチしようか♡」

「う、うん。お手柔らかにね？」

ちうっ♡と優しく唇を吸われて、私は彼の首に腕を絡める。

挿入がしやすいようにと体勢が整えられ、改めて入り口に熱いものが押し当てられた。

「セレン、大好きだよ。だーいすき♡」

「あ、あ、リツカ……♡私も、だいすき……♡」

唇を重ね合い、甘く舌を絡めて。

とろりと思考が蕩けたところで、ググツと入り口が割り開かれる。

「あッ、うう……っ」

「ごめんね。苦しいね」

初めて受け入れるリツカの男性器は、とても大きく感じられた。

それが平均以上のサイズなのか。それとも私が初めてだから苦し  
いのか、判別は出来ない。

ただ私は、少しずつ奥を目指していく熱塊をはくはくと息を乱し  
ながら、受け止めていくだけだった。

「ふあっ！アッ、あ……♡」

大きく張り出した先端がずりゅんっ♡と中に埋まり、お腹側にあ



る気持ちいいところを強かに擦った。

狭いところを押し広げられる苦しさ快感が混じり、頭の中がぐちゃぐちゃになる。

「っ、きつ……」

イイところを圧迫される感覚に感じ入っていると、リツカが呻いた。どうにか締め付けを緩めようにも、うまくいかない。

「ふっ、くっ♡はーっ、はーっ♡」

「あ、あッ！あッ♡」

少しずつ、少しずつ。内壁を擦りながら突き進んでいく剛直。

最初に快樂のスイッチを押されたからか、私は中をヒクつかせながらひたすらに感じていた。

「はっ、すごいな。吸い付かれて、気持ちいい……♡」

「あ、リツカ……」

私がきゅうきゅうと締め付けているリツカの大事なものは、私の中でビクビクと跳ねている。

それが気持ちいいという証拠なら、何だか誇らしい。そして受け入れているそれを、愛おしく感じる。

「もっと、奥まできて……？」

「っ、セレン……」

中ほどまで挿入して止まっていたリツカの腰に、私は足を絡めた。まだ苦しいのは確かだけれど。リツカが気持ちいいのなら、もっと大胆に進んでみてほしい。

だって根本まで全部包んであげられたら、彼はもっと気持ちよくなれるはずだ。

母性本能にも似た感情を抱きながら、私は足で彼の胴体を締め付ける。そして、そっと体を引き寄せた。

「大丈夫だから。ね……？」

「はあっ、うん……♡」

右手ですべすべの頬を撫でて更に促せば、リツカは目を閉じて私の手に頬を擦り寄せた。

そうして彼は腹部に力を込め、腰を突き出す。

「あ……っ♡グポッ、て、ああんッ！」

「はーっ、はーっ♡セレン、セレン♡セレン♡」

お腹の中で何かがブチリと破れて痛んでも、もうリツカは止まらなかった。

行き止まりを目指して、鋼のように硬い杭がズンズンと進んでいく。

「あっ、あっ、ながっ、はあっ♡」

「うう、きもちい♡♡セレンのおまんこ、すっごい気持ちいい、に

やあ♡♡」

想像していたよりももっと、深いところまで入り込んできている。その上、まだ侵攻が止まらないのだ。

予想外の事態に青褪める私に対し、リツカは嬉しそうに目を細め、強く腰を押し付けてきていた。

「セレンの中あ、狭いけどオレのサイズにぴったり♡ぴたあって張り付いてえ、よしよししてくれてるのにやあ♡♡ああ、セレンのおまんこっ♡すっごくきもちい♡」

「あ、あ、あ……♡」

全てが埋まりきる前に、我慢が出来なくなったのだろう。

リツカの腰は前後に揺れ出し、深いところまで埋まった肉杭が、ズリズリと内壁を擦り出す。

「セレンの中、熱くてふかふかで♡オレのちんぽ溶解そう♡♡あ

くく♡ちんぽでおまんこをゴシユゴシユすると、すっごい♡♡あ  
あ、すーっごい♡♡」

「ああっ♡あッ！あ、まって、ああおっ♡♡ゆっくり、いつ  
♡♡」

最初は遠慮がちだった抽挿が、次第に激しくなっていく。  
リツカの腰に絡めていた足は、再び宙に浮いて。彼が動く度にブ  
ラブラと揺れていた。

「おおっ♡ここ、擦るとめちゃうちゃ中がうねる……！セレンは  
ここが好きにやんだなあ♡♡」

「おおッ!? おッ♡♡お、ああ……ッ！」

奥の方にある弱点を見つけられ、先端でずりゆずりゆとしつこく  
そこを擦られる。

刺激の強さに勝手に腰が震え、お腹の奥に熱くて重い感覚が蓄積

していった。

「ああ、ここ、すっご♡擦れば擦るほど♡セレンの中が、ぐじゅぐじゅになるっ♡おまんこがオレのちんぽに媚びて、トロトロになるうっ♡♡」

「ひっ、あああゝゝっ♡♡ああ、あーっ♡♡」

勢い余ってドスンッ♡と最奥に先端がぶち当たることもあるが――それもまた、気持ちが良い。それに気付いてか気付かずかは分からないが、リツカは先端でゴツゴツと最奥をノックしながら、私を感じる場所をしつこく擦った。

「まって！まってえッ♡だめ、もうっ♡も、お……っ」

「セレンっ♡セレンっ♡すきっ♡オレの番！」

しなやかな筋肉を存分に使い、リツカは強く、素早く、私に腰を叩き付ける。

触れ合う肌はパンパンと音を立て、膣内は二人分の体液が混じって酷い水音を立てていた。

「セレン！セレン！セレンっ♡♡♡♡」

「あふッ♡ま、おッ♡おふ、おッ♡」

喘ぎ、息を乱している口を、彼の口に塞がれる。

ただでさえ感じすぎて酸欠状態だったのに、酸素を取り込める量が圧倒的に減ってしまった。頭がクラクラし始める中で、私は剛直によってぶちやぶちやと蜜壺を耕される。

「イ……ッ！ひっ、くう……！」

「んぢゆるるっ♡ぢゆるるっ♡せれんっ♡んぢゆっ♡」

刺激の強さに突き出した舌を、めちやくちやに舐めしゃぶられる。ザリザリとしたトゲで舌裏を擦られながら、私は脳内を白く霞ませた。

「イけっ♡おまんこイっけ♡んぢゆるるっ♡」

「あ、おお……♡♡」

限界まで収縮する膣内を、太くて強い雄にガツガツと踏み荒らされる。そうしながら私はストンと落ちるように、絶頂に至った。

「あひ、ひい、ああ……っ」

「はーっ♡はーっ♡グルルッ♡グルッ♡」

興奮したように舌を舐めしゃぶられ、尚もごちゅごちゅと奥を突かれる。

やめてと言いたいのに関彼の舌が邪魔で喋れない。

逃げたいのにガツチリと抱き込まれていて身動きが出来ない。

自分の雌を手中に収めて上機嫌になっている雄を前に、私は何も出来ないのだ。

「可愛い可愛いオレの番♡♡だいすき♡♡だーいすき♡♡いっぱい気



持ちよくなつてね♡♡」

「おっ♡おっ♡おッ！おっ……♡♡」

今度は顔中をベロベロザリザリと舐め回されながら、奥をグツグツ♡と集中的に突かれる。

子宮を揺さぶられる感覚にチラチラと白目を剥く私の視界には、ずっと黄色い虹彩が映っていた。

「セレンは沢山イクイクできて偉いにゃ♡いいこ、いいこ♡ほら、いいこいいこのリズムで奥を突いてあげるっ♡」

「あ、これ、いっぐ……っ！」

いいこ、いいこ、と。繰り返し褒められながら、ズン、ズン、と子宮を押し上げられる。

それがあまりにも気持ちがよくて。ぎゅううっとおちんちんを締め付けても、硬すぎて途中から収縮できなくなるのがたまらなくて。

私はいいいいこと囁かれながら、絶頂への階段を上っていった。

「いいこ、いいこ。おまんこヒクヒクできて、いいこ♡セレンは偉いにゃ♡♡」

「イッ、く……！イクイクイク……！」

おっふ、と最後に鳴いて、私は達した。

そこへ更に注がれる『いいこ』。

「いいこ♡♡いいこ♡♡上手にイクイクできたセレンは、もっといいこ♡♡にやははっ♡あー、またイッちやったあ♡」

「ハッ、ハッ、あぐ……ッ♡♡お、ふう……♡♡」

ひたすら奥をズンズンしてくるリツカのをギチギチに締め付けながら、私は二度、三度と絶頂を重ねる。

大きくズリイッ♡と中を擦られるとそれもまた、たまらなくて。

膣内は今や、どこもかしこもが性感帯になっていた。

「セレンのおまんこは、リツカのおちんちんを沢山もぐもぐしてくれてすごいにゃあ♡ありがとう、セレン♡気持ちいいよ♡お礼にもっと中をごしゅごしゅしてあげるからねえ♡」

「いっぐ♡おおッ♡しゅごっ♡そこっ！ああ、きもちい……！」  
私が下腹部に力を込めて、次の絶頂の準備を始めたところで――  
激しい律動が開始された。

大きなスラストで蜜道を強かに擦られて、一瞬で頭がパーになる。  
目の前も白く霞んで、私は自分が何を口走っているかも分からな  
いまま、『気持ちいい』に塗り潰された。

「んぎゅう……ッ!!」

「あっ、あー……♡お潮、吹いちゃったねえ……♡」

気持ちいいが限界を超えた瞬間、きつと私の体に何か起きたのだ  
ろう。

リツカがそれに触れた気がするが、理解する前に彼の言葉は私の意識を通り抜けていってしまった。

「はひっ♡ハッ、おひッ♡あ、あへ……っ♡」

「んっ♡グズグズになっちゃって、かわいっ♡もおっといじめたくなっちゃっ♡♡」

ずりゅずりゅ♡ゴンゴン♡ぶちゃぶちゃ♡ブシユツ♡

様々な音と、様々な衝撃。

今や私の両目は、完全に白目を剥いていた。

目を優しく舐められている感触があるが、反応なんて出来ない。私は大口を開けて、いくことしか出来ないのだ。

「はひ、あ……♡あ、へ……♡」

結合部が度々温かくなるのは何故だろう。

もしかして洩らしてしまっているのだろうかとか心配が過るが、強

烈な突き上げで僅かに残った冷静な思考は、彼方へと吹っ飛ばされていった。

「あー……、出そう……♡セレン、番せーし、出るよ……？」

「あ、ひ♡あひっ♡お……ッ!!おっおッ！」

目を上向けて暗闇に飲まれ、正常な位置に戻して鮮やかなレモン色を視界に映す。

黒と黄色を交互に目にしている内に、やがて黄色のみが網膜に焼き付いた。

「一番、奥にだす……♡オレの雌を孕ませる、子種っ♡セレンの、一番、おく、にい……ッ♡♡♡」

「いっ、ぐう〜っ!!イグッ!い……ッ!」

遠慮を捨てたようにがむしやらに腰を叩き付けられて、私はあえなく達した。

それでも奥はゴツゴツと先端に殴られ、内壁は苛烈に擦られる。

暗闇に包まれたはずの視界でバチバチと光の粒が弾け、目蓋で覆われているはずなのにレモン色を見つけた。

ガクガクと揺れる腰を力強く掴まれて、ラストスパートとばかりに強烈な律動を見舞われる。

「ああ、出るツ♡でる！でる、ああ、セレン……！」

「いっく！いくうツ♡♡いくのおっ！もうやあっ」

焼けるほど熱く、これまでより更に膨張した杭にめちやくちやに中を擦られて。前後不覚の常態でいきまくる私に、尚もリツカは腰を叩き付けてくる。

彼の睾丸でバシバシと叩かれているお尻までジンジンと疼く始末で、もうどうしようもない。

「あっ、は……！せれん……！ぐ……っ」

「んぐツ!?……きゃっ!?や、あぁあゝゝっ!!」  
どっちゅん!と最奥に先端を叩き付けられ、そこでリツカの動きが止まったと思えば。彼のものの先端から熱いものが溢れ出し、それを皮切りにダクダクと夥しい量を注がれる。

「あ、や、あぁあ……」

灼熱の液体は先端が口付けている子宮口を通り、奥の小部屋へと溜まっていく。

散々入り口をノックされて度々ひしゃげていたその小部屋は、突然やってきた大量の熱い液体にビクビクと震えながらも、しっかりと飲み下していった。

「お、おなか、あつい……ん、う」

「はーっ、はっ、んぢゅっ♡はあっ♡」

吸われ過ぎてピリピリしている口を、またもや奪われる。

リツカはどうやら、キスが好きすぎるようだ。

私の舌を瞬時に見つけては、しつこすぎるほどに舐め上げてくる。

「んん、もう、やっ！キス、やら」

唇も舌もピリピリするし、息も苦しい。

だから私はなりふり構わず、腕を突っぱねて彼の胸板を押した。

「……はっ？なんで？」

「えっ？」

すると予想よりも格段に低く固い声が、彼の口から放たれた。

信じられない気持ちで顔を見上げると、眇められた瞳が鈍い光を

発している。

「オレとのキスが、嫌なの？」

「あ……口、ピリピリ、するから……」

物凄い圧を感じて口ごもり、俯きながら答える。



力が抜けた腕は彼の体に押されて、中途半端に畳まれた。

「……………口が痛いから、キスしたくないの？」

「う、うん……………ごめんなさい」

俯いたまま謝って、ドキドキしながら上目にその瞳を見つめる。目を逸らしたまずいと、本能が告げていた。

「……………なあんだ、そっかあ♡」

「えっ？」

場違いなほど明るくなった声。

私は呆氣にとられ、ポカンと口を開けた。

見つめる先でリツカが、にこにここと笑っている。

「ごめんねえ、セレン♡オレ、番に拒絶されたのかと思ってびっくりしちゃった。……………にやあ♡♡」

「あ、そ、そっか……………？誤解がとけて、よかった……………??？」

突然甘くなった声色も、取って付けたような「にやあ」も。

私の混乱を助長させ、心音を加速させた。

私は背中にじとりと嫌な汗を掻き、未だに彼のものを咥えている隘路をヒクリと震わせる。

「あーもうっ♡怯えないで?? 大丈夫だよ、怖くないよ♡誤解して謝らせてごめんにやあ♡」

「う、うん。だい、じょうぶ」

腕を擦られ、肩を擦られ、頬を撫でられる。

宥められているのだと分かっているが、未だにドクドクと鼓動が五月蠅い。

知らなかったリツカの一面。

それを目の当たりにして、私は動揺していた。

（でも、そうよね。リツカは……獣人だもの）

番のこととなると目の色を変えるのが、獣人という種族だ。

異種族である番の心変わりの気配に過敏になるのも、当然だろう。私は改めてじっくりとリツカの様子を観察した。

——すると顔はにこにこ笑っているが、耳がぺたんと伏せていると気付く。きつと、やってしまったと猛省しているのだろう。

こめかみからタラリと、汗が垂れるのが見えた。

「……ふふ。お互いにごめんねってことで、仲直り、ね？」

「——うん。ありがとう、セレン！」

ぱあっと輝くように笑って、リツカは私に口付けようとして——ハッと動きを止めた。それから少し恨めしそうに私の唇を見つめてから、すり、と頭に頬擦りをしてくる。

「オレの舌のせい？ 番に痛い思いをさせるにやんで、オレは番失格だあ……」

「ふふふ、次から気を付ければいいのよ。失格なんてそんなことないわ」

私はしよげるリツカの背中をポンポンと叩いて、慰める。

次によしよしと頭を撫でれば、髪の毛と同色の尻尾が手首にしゅるりと絡み付いた。

「セレンはいつも優しいね♡だからオレ、だあいすき♡んふふっ」  
「……っん♡」

ゆさ、と軽く体を揺さぶられて、ゴツ、と奥に衝撃が走った。

少し萎えていた彼のものは、仲直りをしてからムクムクと膨張し、今では立派な硬度になっている。

「ねえーセレンー♡もういっつかあい♡」

ゴロゴロと喉を鳴らしながら甘えてくる番の大きな猫ちゃんを、

私は「仕方ないなあ」と甘やかしてあげるのだった。